

1. 生産コスト縮減に向けた取り組み

1) 低コスト省力化対策

① 農業機械の共同利用による償却費節減

個人で所有している農業機械を集落営農組織や機械利用組合の結成によって共同利用することによって、過剰投資を抑え、機械の稼働率が向上した、結果、低コスト経営が可能になる。

取組の事例

○彦根市の集落営農組織では、組織単位で機械を購入し低コスト生産と合せ計画的な作付けを行っている。

② 大豆等との輪作による肥料の削減

大豆後に麦を作付けする場合、生育過多となり倒伏による品質低下を招くことが多い。大豆後の場合、基肥量を削減しても収量品質に影響ないことが示されている。

(福岡県農業総合試験場)

普及に当たっての留意事項

・肥料・改良資材の施用にあたっては事前に土壌分析を行って、圃場に含まれる化学成分量を把握しておくことが必要である。

普及に当たっての留意事項

・規模の応じた機械の計画的導入に努め、過剰投資を避ける

大豆後作小麦の播種量、施肥法と生育、収量、品質(平成13~14年の平均値)(福岡県農業総合試験場:石塚)

品種	播種量 kg/10a	施肥法 Nkg/10a	成熟期 月日	倒伏程 度	稈長 cm	穂数 本/m ²	千粒重 g	精麦重 kg/a	容積重 %	検査等 級	蛋白質 含有率
シロガネコムギ	7.3	3+6+2	6.1	0	79	537	34	55.1	825	1.8	10.1
	〃	3+4+2	6.1	0	78	504	35	51	829	1.5	9.8
	〃	0+7+2	6.1	0	75	496	35	53.4	823	2.0	9.7
	有意差			ns	ns	ns	ns	*	**	ns	ns
チクゴイズミ	7.7	3+6+2	6.3	1.8	81	460	35.6	54.4	790	3.3	9.1
	〃	3+4+2	6.3	0.8	80	460	37.2	53.4	797	2.0	8.6
	〃	0+7+2	6.3	0.7	81	443	37.2	56	804	2.8	9.4
	有意差			ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	*

注)1.土壌の種類は細粒灰色低地土(埴土)で得られた成果。

2.播種時期は平成13年が12月3日、平成14年が12月10日。大豆残さは全量すき込み。

3.施肥法は10a当たりの窒素施用量を基肥+分けつ肥+穂肥で示す。

4.*、**は各々5%、1%水準で有意であることを示す。nsは有意ではない

2. 生産コスト縮減に向けた取り組み(経営シミュレーション)

(千円/10a)

項(費)目	H29現状		改善後		削減率	主な取組み
	費用	割合	費用	割合		
種苗費	3	4.5%	1	1.7%		
肥料費	10	15.0%	8	13.9%	19.0%	・大豆輪作等による肥料削減
農業薬剤費	1	0.8%	1	0.9%		
動力光熱費	1	1.5%	1	1.7%		
諸材料費	1	1.5%	1	1.7%		
減価償却費	9	13.5%	6	10.4%	34%	農業機械共同利用による償却費節減
雇用労働費	0	0.0%	0	0.0%		
その他経費	42	63.2%	40	69.6%		
計	67	100.0%	58	100.0%		
H29現状対比	100%		71.1%			

(注釈)

* は、平成25年度長崎県農林業基準技術で採用した技術である。

主要な取り組みの赤字は、今後導入及び普及が期待される取り組み(技術)である。

各費目毎の削減率は、主要なコスト縮減の取組を組み合わせた際の削減率である。